

新しい文化政策プロジェクト 2022 年勉強会シリーズ  
第 2 クール「教育と研究——未来への選択肢——をめぐる集中討論」

第 1 回

(レポート：佐藤岳流)

日時： 2022 年 9 月 18 日（日）13:30～15:30  
会場： 京都大学芝蘭会館別館 2 階 研修室 1  
講師： 西岡加名恵（京都大学大学院教育学研究科教授 教育方法学専攻）  
出席者： 佐野真由子、山本麻友美（以上、プロジェクトメンバー）、一般申込みによる参加者 9 名、佐藤岳流（京都大学佐野研究室学生）

2022 年勉強会シリーズ第 2 クールの皮切りにあたる本会では、冒頭で佐野真由子プロジェクト代表からの挨拶と「教育と研究」という今クールのテーマを掲げた意図——今後の文化政策を提言しようとするうえで、広義の「教育」（人をつくること）の問題にどうしても踏み込むことになる、ひいては集中的に勉強し、議論する必要があるという問題意識——の確認、参加者全員の自己紹介ののち、西岡加名恵氏によるご報告、それを受けての全体討論が行われた。

**【講師による報告】**（脚注はレポート作成者による補足である。）

西岡氏は「小・中・高等学校におけるカリキュラムの動向」と題し、学校教育の現状について、国家による政策の動向と西岡氏自身が関わっている現場の様子の二つの面から報告された。報告は以下の通り大きく五つのパートに分けて進められた。

### **1. 日本における教育課程政策の動向**

2017・18 年改訂学習指導要領のキーワードは「新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実」であり、「資質・能力」については次の「三つの柱」が掲げられた。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

この改訂に至った政策の背景には、国家による影響力の弱化や ICT 化をはじめとする、昨今の社会における予測不可能な激しい変化があるという。

上記のキーワードにおける「資質・能力」に関連して、OECD の「キー・コンピテンシー」などの能力論が紹介された。西岡氏は、OECD などの議論の根底に高次の認知能力や対人関係能力の育成を強調する動きがあったとしたうえで、それに対して次のような批判があったことを紹介された。

- ・誰の、どんな要求を反映しているのか？
- ・誰を対象としているのか？
- ・人間の内面性まで学校で評価してしまってよいのか？
- ・従来重視して来た評価内容が軽視されてしまってもよいのか？

これらの声を受け、OECD では「知識・技能」を含む形でコンピテンシーを捉え直す方向へ軌道修正がなされたほか、日本の学習指導要領においても、三つの柱で捉えられる「資質・能力」の保障を目指す方向に落ち着いてきているという。

最後に、2017・18年以降の展開についても言及された。たとえば、中央教育審議会答申（2021年1月）では、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」と題して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の二つが重視されている。このような政策では多様な子どもたちを包摂する学び環境の整備が謳われているが、西岡氏は、ICT化に対応できない家庭環境が存在するように、政策が実際の状況に合致せず機能不全に陥るケースもありうることに對して危機感を示された。

## 2. 「探究的な学習」

ここでは、主に西岡氏の前任校・鳴門教育大学の附属小学校における総合的な学習の時間での事例が紹介され、児童が教師や同級生との対話を通じて課題設定や手法を研ぎ澄ませていく過程が示された<sup>1</sup>。

また、近年では高等学校において「探究的な学習」が特に重視されていることも確認された。例えば、スーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）においては、「仮説―検証」型、「実地調査」型、「論証・証明」型などの多彩な展開がなされ、複数の学校では自然科学系だけでなく人文・社会学系の探究も行われている。そのほかにも、サービス・ラーニングとして地域活性化に高校生が貢献する事例や、地域ニーズに応じたビジネス情報システムの開発が行われることもあるという。

さらに、総合型選抜（旧・AO入試）や学校推薦型選抜（旧・推薦入試）の比率が高まっていることについても言及され、一例として京都大学教育学部の特色入試（志願者がポートフォリオを提出し、高校時代の活動をアピールする方式）が紹介された。

## 3. 教科におけるパフォーマンス課題

パフォーマンス評価とは、現実世界において力が試される状況を模写・シミュレーションしながら知識やスキルを使いこなすことを求める評価方法であり、西岡氏が10年以上にわ

---

<sup>1</sup> ここで紹介された事例については、西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計』図書文化、2016年、200ページ、宮本浩子・西岡加名恵・世羅博昭『総合と教科の確かな学力を育むポートフォリオ評価法・実践編』日本標準、2004年、41ページに掲載されている。

たって重点的に研究を進めてきた課題である。これにより、生徒に学習の意義を実感してもらい、実生活で使える力を身に付けさせていくという。

教科におけるパフォーマンス課題（＝様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような、複雑な課題）として、以下のように複数の事例が提示された。

- ・ 公民で学んだ政治の仕組みの知識を活かし、民主的な国家をつくる方法を考える。
- ・ 免疫の仕組みについて養護教諭になったつもりで紙芝居を作る。
- ・ 理科の授業でラベルが剥がれたボトルの中身を特定する。
- ・ 英語の授業のなかで思い入れのあることを英語で発表する。

こうした課題を作る際には、「本質的な問い」を明確に設定し、その問いにつながるような課題をつくることが重要だという。

#### 4. 大阪市立生野南小学校の取り組み

つづいて報告の内容は、大阪市立生野南小学校（2022年3月末に田島南小中一貫校に統合）の事例へと移った<sup>2</sup>。この学校では10年ほど前まで暴言・暴力行為が日常茶飯事であったが、「個の人権を重んじた一枚岩の生活指導」「人権教育の充実」「すべての個性を輝かせる場づくり」「国語科を中心とした教科教育での学力保障」「『生きる』教育」といった取り組みを通じて、校内の状況を改める学校づくりが行われてきたという。

具体的な取り組みとして、喧嘩両成敗の扱いをせずに問題状況を丁寧に把握して適切に指導する、平和教育や国際理解教育などの人権教育を提供する、「ことばの力」を育てるよう国語科教育の研究に取り組む、授業や行事などで児童が活躍できる場（劇の発表や運動会など）を作ることが挙げられた。また、学年別の「『生きる』教育」では次のような指導が行われたことが紹介された。

- ・ 1年生：プライベートゾーンについて。
- ・ 2年生：赤ちゃんの誕生と成長について。
- ・ 3年生：子どもの権利条約について。
- ・ 4年生：将来どう生きていきたいかについて。
- ・ 5年生：デートDVについて。
- ・ 6年生：心の傷への対応の仕方について。

---

<sup>2</sup> この事例・実践については、「生野南小学校シリーズ」として、第1巻「『生きる』教育」（日本標準、2022年）が刊行された。今後、第2巻「荒れる心に言葉の響きを（国語科教育）」、第3巻「子どもたちの『今』を輝かせる（学校づくり）」が刊行される予定。

また本会では資料として、西岡加名恵・小野太恵子「『荒れ』を克服し『学力』を保障するカリキュラム改善のプロセス——大阪市立生野南小学校の事例検討」『カリキュラム研究』第31号（2022年）、29-41ページが配付された。

## 5. 小括

西岡氏は、以下の二点をまとめられて報告を閉じられた。

- ・学校に対する社会からの風当たりが強くなっているが、各校教員による創意工夫の努力を応援してほしい。
- ・地域と学校がつながる際には様々な困難が生じうるが、子どもたちや学校がおかれた状況に対して、地域の人々もできるだけ理解をしてほしい。

### 【参加者による議論】

西岡氏による報告を受けて参加者による議論が行われ、様々な意見が出された。以下はその概要である。

[以下は全員での自由討論として行われたものであり、西岡氏と参加者との質疑応答ではない。]

- ✓複数の角度から学校教育現場の実情を紹介していただいたが、通底する大きな問題は、学校が担うべき役割はどこまでか、というところにあるように思われる。学校の役割をめぐる議論の現在地はどのようなところにあるのか？
- ✓学校に求められる役割は、学力をつけることから「生きる力」を身につけることまで、歴史的にみて拡大する流れにあることは間違いない。
- ✓学校の役割を拡大することが現場の意向や教師の能力次第で進められ、拡大するほど社会から賞賛される傾向にある。しかし一方では、学力を保障することが重視され、地域との連携や指導の一部を外部委託化するなど、学校の役割をある程度限定する方向にも動いている。
- ✓現在まで社会は学校に大きな期待を寄せてきたが、多くの教師が過労で苦しんでおり、教員志望者数も大きく減少しているなど、学校現場は限界をむかえている。このような状況を受け、学校に求められている役割の外部化が議論されているが、外部化する際には果たして誰がその役割を支えるか、という問題がある。
- ✓学校に社会的養護の役割が求められる傾向にある。児童養護施設だけで子どもの虐待問題を防ぐことは困難な状況であり、とくに公立校の場合、学校が最後の砦となっている場合も少なくない。
- ✓社会における格差の拡大とともに子どもの貧困率が上昇している現状において、学校が子どもの貧困問題に何らかし介入することを求められる状況がある。
- ✓家で悩んでいることを学校で話してよいと思っていない子どもが多い。悩んでいることを学校で相談してもよいということを伝えることが必要。

- ✓ 配布された資料にある「進路多様校」をどう理解するか。今の教育システムにおける高校のランクのなかでは「底辺校」の言いかえとして言わざるをえないのが実情であろう。
  - ✓ そのような意味での「進路多様校」ではなく、ポジティブな意味として「進路多様校」が認識される社会にはなりえないだろうか。
  - ✓ 実際、現代社会において専門学校、職業訓練校の多くは、いきいきとしている。一方、普通科で偏差値が比較的低い学校は元気がなく、高校改革をもっと進めるべきだという声があがっている。
  - ✓ 大学に進学することが進学しないより望ましいなど、「このような進路がより優秀」というような社会全体の判断基準や価値観を、もっと多様化することはできないだろうか。
- 
- ✓ 現在問題となっているのは「無気力」な子どもたちであり、彼ら彼女らはかつてのいわゆる「不良」のように社会に対して不満をぶつけるという気力もない。
  - ✓ 学校が子どもたちの成功体験を作り出すような活動をしようとしたとき、地域がその活動の受け皿になることができるかもしれない。
  - ✓ 学校と地域の連携事例はすでに存在しているが、場合によっては学校関係者の負担がとてもし大きくなりうる。学校側の負担を減らすには、連携先がいかに学校や子どもたちの置かれた状況を理解しているかということが重要である。
  - ✓ 学校はどのような受け皿を求めており、拡大傾向にある学校の役割の一部を安心して任せられる存在はどのようなものなのだろうか。
  - ✓ いわゆる「お助け隊」のように、校外学習や総合学習の際に手助けをしてくれる団体のような存在は、学校側が非常に助かることが多い。
  - ✓ 学校と地域団体のマッチングを学校側ではなく地域の人々ができるようにすれば、教師たちの負担を減らすことができるのではないか。
  - ✓ 学校という場には、様々な意味で閉鎖的な面がある（例えば、多くの保護者は授業参観など限られた機会しか学校に行かない。また、参加者の経験から、学校で起こった事故をできるだけ伏せる方向で対応された事例もあった）。社会と学校がどのようなつながりを築くかということを考えていく必要がある。
  - ✓ 伝統芸能など「美しいものを美しいと感じられる」ような「感性」を若いうちから育むことが重要である。その「感性」の育成のためにも、地域の人々の力をもっと学校教育に活かす仕組みを作ることができないだろうか。
  - ✓ 出前授業のような単発の行事であれば、講師の存在自体が物珍しいために子どもたちを惹きつけることは簡単だが、教師が毎回の授業で子どもたちを惹きつけることは簡単ではない。
  - ✓ 個人情報保護などの観点から保護者や地域の人々の力を活かすにくい。人材バンクのような制度が備わっている学校もあるが、公立校の場合には教師の異動があり、継続的なつながりを形成することは難しい。

- ✓学校により置かれた状況は様々であり一概にまとめることはできないが、国による政策では、詰め込み型の教育ではなく、思考力・表現力・判断力、および学びに向かう力を育成することが強調されつづけている。
  - ✓政策上学校の役割が拡大されつづけている一方で、最も基本的な役割は学力保障ではないか。あらゆることを学校に担わせようとするのではなく、学校の役割を学力保障にある程度限定したうえで、子どもたちが様々なことを経験できる空間づくりを行っていくべきではないだろうか。
- 
- ✓パフォーマンス評価が行われる現場では、子どもたちが「教師が理解できる」あるいは「教師が喜ぶ」ようなパフォーマンスをしようとするのではないか。もしそうであれば、それは「表現」を何重にも疎外するシステムではないか？
  - ✓パフォーマンスまで評価されてしまうと、子どもたちの「逃げ場」がなくなってしまうのではないか。あえて評価の範囲を縮退させるという選択をしてもよいのではないか？
  - ✓「子どもたちを評価する教師」を評価する仕組みを整備する必要があるのではないか？
  - ✓学校を卒業した後の実生活で生きるような知識をどうすれば子どもたちが効果的に身につけられるか、ということがパフォーマンス評価研究の根底にある。
  - ✓教科書に書かれた文章を丸暗記するのではなく、各事項の因果関係や関連性を子どもたちが自分なりに咀嚼し、理解できるようにすることがパフォーマンス評価で目指していることである。
  - ✓教科の中でのパフォーマンス課題においては、それほど子どもたちに自分の内面を炙り出すことを求めるようなことはない。ただし、価値観に基づいた選択が自由であることは、教師がきちんと理解している必要があり、価値観自体を評価してはならない。
- 
- ✓他国では、社会的な議論を呼んだ展覧会に教師が生徒を連れていく例があるが、日本ではそのようなことはほぼあり得ないように思われる。その間にある違いとは何なのだろうか。
  - ✓学校内における価値観や規範は教師と生徒との間でつくられるものであり、学校のリーダーによっても容易に大きく変化する。世の中全体が失敗を許容しない雰囲気を強めているなかで、失敗に寛容な雰囲気を学校内で作り出すのは難しいと思われる。
  - ✓日本では「均質」を求める風潮が強く、対立の発生を自然なこととして捉え、そこから妥協点を見出していくプロセスを大切にす価値観が弱い。
  - ✓好きなことを好きだと主張でき、辛いときに辛いと言えるような雰囲気がある学校にしていかなければ、学校は窮屈な時間・空間に子どもたちを押し込める場所になってしまう。